

## 15. 住生活

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 林, 若菜 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/46937">http://hdl.handle.net/2297/46937</a>

## 15. 住生活

林 若菜

1. はじめに
2. 上町地区の住生活
3. 近年の増改築
4. 考察
5. おわりに

### 1. はじめに

上町地区での聞き取り調査では、多くの民家が風通しの良いつくり、広い玄関からの来客用スペース、水回りの位置といった共通点を持つことに気付いた。調査を進める中で、上町地区の家屋は基本的には伝統的な家のつくりには依拠しつつ、家族や時代の変化に合わせた増改築が重ねられていることを知った。地域の人々の住生活、家族や家屋のあり方の変化に興味を持った。

本章は上町地区を事例に、能登地域の住居の特徴と近年の増改築についてまとめ、地域の人々の生活の変化に住居がいかに関連しているか考察することを目的とする。

### 2. 上町地区の住生活

#### 2.1 伝統家屋の間取りと特徴

ここでは『柳田村史』(1975:935-949)に基づき、旧柳田村上町地区をはじめとした、能登地方の家屋の特徴について述べる。また1975年以降の変化については、主にAさん(五郎左エ門分、女性、40歳代)、Bさん(男性、神和住、60歳代)、Cさん(寺分、男性、90歳代)からの聞き取りに基づいて記述する。

#### 外観

『柳田村史』(1975年)によると地区には建築年次の古い家があり、その様式は現在(2016年)まで受け継がれている。村の民家はかつて馬産地であったことを反映し、母屋と厩を持つのが一般的である。民家の土台は自然石を用い、その上に栗材の柱を建てている。積雪に耐えるよう柱は一間毎に建てられ、頑丈なつくりとなっている。

屋根は元来茅葺きであり、勾配は雨雪を早く流し去るよう急になっている。茅葺き屋根の寿命は降雨量と乾燥の程度で異なるが、湿度の高い能登では寿命は短く、旧柳田村ではふつう日当たりの良い側で20~25年、その反対側は15年である。茅のふき替えはもともと集落の住民が自ら行っていたが(結)、非常に手間のかかる作業であるため、現在は瓦葺が普及している。

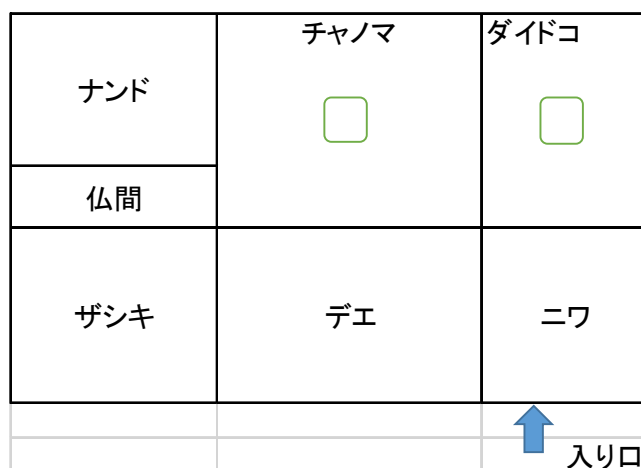
## 間取り

旧柳田村の母屋の間取りは、奥能登一般のものと共通的なつくりである。その原型は間口 6 間、奥行き 4 間で、一側にニワをもった四間取りのものである。この四間取りで前半分（デエ、ザシキ）は接客用、後半分（ナンド、チャノマ）は家族の生活用、ニワは農作業用である。最もよい条件の場所が時折の来客用にあてられ、家族は条件の悪い所で生活するというつくりになっている。

現在一般的な間取りはこの型が複雑化したもので、間取りの特徴は仏間がナンドとザシキの間、家の中心に設けられたことである（図 1）。これは浄土真宗の普及によって改変されたもので、宗教的行事にあたっては家全体が一室となり、その中央に仏壇が位置するように構成された。また、ニワは区切られ、台所がつくられるようになった。

以下に、各部屋の用途、特徴について述べる。

図 1 奥能登の住宅の一般的な間取り



（『柳田村史』1975：941より）

## ニワ

秋雨が多く、積雪期の長いため秋冬の間屋外作業を行うことが困難な能登では、ニワで農作業が行われた。

## メンジャと台所（ダイドコ）

ニワの後半分に造られているメンジャ（流し場）は土間で、ここには水ブネがあり外から各川の水や清水を引き込んでいた。台所はメンジャに続き、食物の煮炊き、食事、夜なべ仕事といった家族の日常生活の場である。

## 茶の間

前述の台所の機能はもともと茶の間で行われていたが、台所が作られてから茶の間は

機能を失い、平常はあまり用いられず、諸行事や来客の接待の場として使われる。ここには神棚が仏間を背にして設けられ、カレンダー、柱時計もおかれる。大きな家ではここは家の中心部となり暗く、またメンジャに遠いことからあまり使われなくなったという説がある。

## ナンド

一般に日当たりが悪く、暗い部屋である。寝室として利用される。

## 仏間

奥の壁際に茶の間の方に面して仏壇がおかれた部屋で、広さ 4~6 畳の暗い部屋である。浄土真宗の信仰心が篤い人々が多い能登地方では、仏壇は大きく立派なものが多い。

## デイ (デエ)

家の前半分にありニワに面した、家族の生活とは関係の薄い場所である。来客用の部屋で、その寝室にも用いた。家族の若夫婦の寝室としている場合もある。

## ザシキ

来客の接待用の部屋で、二間の床の間があり、屋外の手入れされた庭に面している。この部屋は畳敷で最上の部屋であり、僧侶やあらたまつた来客の場合に用いる。

## 風呂

昔は風呂を薪で沸かしていたが、薪の調達には手間がかかるため次第に石油ボイラーに移行した。後には電気で風呂を入れる家も多くなった。

## 便所

シンチャ、シチンなどとも言われる。もとは厩の中に造られた。旧柳田村の多くの住宅では、玄関から向かって右側に便所がある。これは昔便所が汲み取り式だった時、外部から糞尿を汲み取りやすくするためである。一般的に上町地区で住宅に水洗トイレが備えつけられたのは、1990 年代頃である。それ以前はトイレ、風呂は母屋の外にあるのが一般的であった。

## ウマヤ

一般にはマーヤーと呼ばれ、川下の位置に設けられ、ニワから土間の廊下を通過して別棟になっている。別棟である点は衛生面ではよいが、雪に埋もれるこの地方としては利便性を考えて廊下でつないだものとみられる。厩は 1m ほどに掘り下げられ、さらに 2~3 室に仕切られている。これは厩肥をとるためで、馬に草を踏ませる。厩は広く、そ

の一部に大便所があり、農具、干草、茅などもおかれていた。その後ほとんどが牛の飼育に代わったが、後には家畜を飼う家は減少し、多くの厩は物置として利用されるようになった。

## いろり

かつて地区のほとんどの家にはいろりがあったが、現在は床板が敷かれいろりが利用できなくなっている場合が多い。これは薪の調達、薪割等にとっても手間がかかるためである。あるお宅ではいろりを利用していた時代、居間は吹き抜けになっていたが、現在では二階がつくられている。いろりの利用減少とともに、茅葺き屋根も減少した。

## 2.2 住居の増改築

旧柳田村の住居は、生活様式・生産様式の近代化に応じて、住居の改善が進められてきた。

まず、従来雨戸は板戸で、明り取りのためにその上部をあけて障子紙を貼るのが一般的であったため、屋内は暗かった。近年これらがガラス戸に変わったことにより、屋内は従来よりもはるかに明るくなっている。

全国的な住宅改善運動<sup>1)</sup>にも影響を受けたメンジャの改造は、住居の改善の中でも先進的に取り組まれた。流しは高く上げられ立ったまま仕事ができるようにし、タイル張りの清潔な感じのものにかわり、風呂場もタイル張りとなった。調理も自給の薪炭から石油・プロパンガスが主流となり、台所を近代的な食堂に改める家もあらわれた。

便所は厩へつながる廊下に新たに設けられた。

## 3. 近年の増改築

ここでは上町地区の近年の増改築と生活の変化の事例を紹介する。

### A さん（五郎左エ門分、女性、40 歳代）

A さんは夫、義父、義母との 4 人家族である。3 人の子どもはいずれも就職、大学進

---

1) 明治から昭和前期にかけての農村の住居は、窓は小さく、あっても油障子であったため室内は暗く冬場は隙間から雪が吹き込むこともあった。流しではしゃがんで作業が行われたため、冷え性や腰痛の原因となった。

戦後、昭和 23 (1948) 年に農林省により、衣生活と食生活の改善を目的とした生活改良普及事業が発足し、昭和 25 (1950) 年から昭和 30 年代半ばには特に流し台、かまどの改善を中心とした台所改善が広まった。これにより下流しが高流しになり、つるべ井戸が手押しポンプからモーターによる揚水、蛇口からの給水となった。かまども単なるつっへいから、煙突をつけた改良かまどに発展し、台所から煙が一掃された。

高度経済成長期には住宅全体を改修する農家が続出した。ニワは応接間に変化し、またテレビなどの影響で子どもの人格を尊重するという風潮が起り、子供部屋がつけられた（『石川の村とくらし』1987：98-100）。

学により別居している。

Aさんの家は大工であった夫の祖父が1951年に建てたもので、現在築65年である。家の基本的なつくりは旧柳田村の伝統的な住居の間取りに則しているが、時代の変化に合わせ、何度かリフォームを行っている。

特に大きく改変したのは水周りである。家の台所は当初薪をくべる窯であったが、1980年代にガスに変え、2011年にはIH式に移行している。また、薪で湯を沸かしていた風呂も2011年の台所改修と同じ時期に改修し、オール電化にした。トイレの改修も1980年代に行っており、水洗式となっている。家を建てた当初、トイレのある場所は農作業場であったが、現在は他の一般的な旧柳田村の住宅に見られるように玄関横に移動している。他に、二階も改築しており、部屋の数を変えた。こうしたAさん宅の改築を行ってきた時期は、近所の中では早い方であったという。

また、家には農作業場が併設され、家の敷地内には蔵がある。Aさん宅の農作業場は二階建てになっており、農業を営むAさんの義父と義母が野菜や米を乾燥させるといった農作業のために利用している。蔵は主に、普段使わない輪島塗のご膳や食器を収納している。これらは「ヨバレ祭り」（年一度、夏から秋にかけて行われ、各家庭で親戚を初めとした大勢の客人をもてなす。この地域では毎年8月に行われる）や結婚式といった行事の際のみに用いるものである。また、蔵には窓がなく日の光が入らないため内部の温度が低い状態を保っており、長期保存をする食物の収納に適している。Aさん宅では味噌や漬物を保管している。蔵は普段はほとんど入らない。

家の中での家族の居場所は、主に自室である。部屋数の多いAさん宅では基本的に一人一部屋が割り当てられており、1階のナンドに義母、2階に夫婦の部屋がある。なお、子ども部屋も二階にあり、子どもが同居していた際は息子1人が一部屋、娘2人で一部屋使っていた。また、高齢であった義父の母のため、玄関横のトイレの隣に部屋を増築した。この部屋は現在義父の部屋となっている。家族は台所で食事をするが、基本的には自室で過ごす。ザシキは行事の時のみ使い、普段は利用しない。

また、高齢であった義父の母のために玄関に手すりをつけ、床の間と玄関入り口との段差を一段増やし、オール電化にしたことで、日中高齢者のみになるAさん宅でも転倒事故やガスの消し忘れといった心配が減った。

居間にはあまり物が置かれておらず、家族も過ごすことが少ない空間であるため、すっきりと片付いている。

旧柳田村の住宅は風通しのよいつくりになっており、Aさん宅でもエアコンはあるが夏場でもあまり使わない。冬場はかつて石油ストーブを利用していたが、煤で部屋が汚れることや子供が小さい頃は危険であることから、ファンヒーターとこたつで暖をとるようになった。

### **Bさん（神和住、男性、60歳代）**

Bさんは妻、息子、息子の嫁の4人家族である。現在の家は1989年10月に新築したものであり、以前の家は茅葺きであったが雪により維持が大変という理由で建て直した。地元大工によって新築されたBさん宅は、田の字型、トイレの位置といった基本的な間取りでは同地域の他の家と同じつくりとなっている。

現在は4人家族だが、多い時には父母と娘、息子の6人家族であった。

Bさんの子供時代から現在までの住生活で最も変化したのは家の灯りである。Bさんが子供の頃は家の周りに木を植え屋敷林をつくることで、台風や雪から家を守っていた。屋敷林があることで屋内は日中でも暗かったが、現代とは異なり時間の融通が利き早寝早起きの生活であったため、不便に感じることはなかったという。

Bさんの家に電気が通ったのは、Bさんが中学生の時である。その後、屋敷林を撤去し、屋内に日が差すようになった。現在Bさん宅を初め地区の多くの家では、冬場家の外壁に雪囲いというトタンが取り付けられている（写真1）。雪囲いがあることで高床の縁側に雪が入らず、また風を防ぐことで保温効果があり、屋敷林に似た効果を得ている。

昔から上町地区では、家を建てる場合には「屋敷、蔵、作業場」の3つが揃って一人前であるという考えが一般的であった。そのため家には蔵、作業場が併設されている。蔵はかつて近所の小作農の人々の米の保管場所としての役割があったが、今では食器類等の物置としてのみ利用されている。Bさんによれば、以前は足りないものを付け足すという増築を重ねてきたが、家族の人数と共に必要なものが減少しつつある現在では減築も視野に入れているという。

### **Cさん（寺分、男性、90歳代）**

単身世帯であるのCさんの家は、1951年Cさんが25歳の時に建てられた。当初から電気はついており、近所でも比較的大きな家である（図2）。

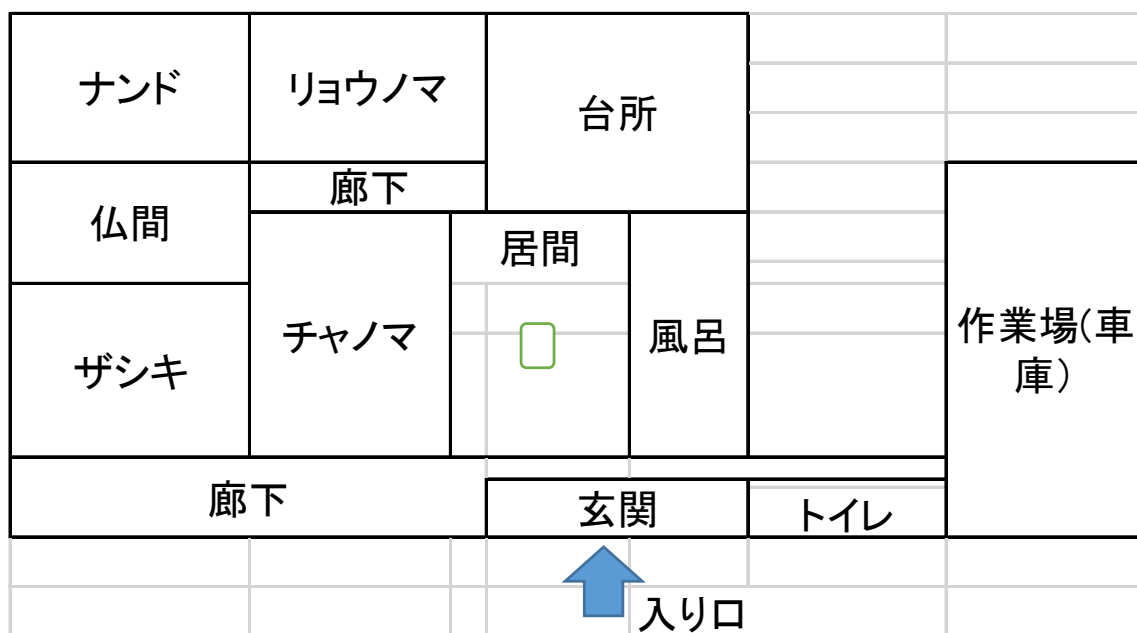
Cさんの幼少時代、家族はCさんの祖父母、父母、姉の6人家族であった。当時生活を営んでいたのは現在の家が建つ前の古い家であり、食事や会話をする家族団らんの場は土間であった。子供は農作業で用いるリンゴの箱を勉強机として使い、土間で勉強をした。寝室は祖父母がナンド、父母と子どもは一緒にザシキを使っていた。冬場の主な暖房はイロリであったが、祖父母の寝室であったナンドには炭のこたつがあった。電気こたつに移行したのは1960年代である。また、Cさんによると、1950年代には多くの家でイロリに蓋がされ、「天井があげられた」（天井が新しく作られた）という。かつては農業で収穫物の加工作業を土間で行っていたが、農業の機械化によって土間には作業場としての役割がなくなった。多くの家で土間の底上げがされたのは、機械化の影響が大きい。なお、Cさんの家は建てた当初から土間には床が敷かれている。

生活の中で大きく変わったのは水周りである。Cさんが子供の頃はまだ水道が通って

おらず、生活水として山水を利用して、水はメンジャの水ブネに溜めて利用された。山水の出は家によって差があり、また夏場には日照りで水が出なくなることもあったため、井戸のある家に水を汲みに行くことが家庭での子供の役割のひとつであった。1960年代に水道が行き渡ると、台所の改築が行われた。風呂も、生活水が潤沢でなかった頃は3日に一度の頻度で入るのが一般的であった。従来は薪で風呂を焚いており、火を焚くのも子供の仕事であった。戦後20年ほど経つとガスで風呂を沸かすようになり、現在Cさん宅では電気で風呂を入れている。トイレは元々農作業場内の一角に造られていた。床に穴を掘り、穴の上に足置き板を二枚置いた簡素なつくりのものであり、子どもがつかまるための縄が上から下げられていた。家に水道が通ってからは、元の農作業場に近い玄関横に新しく水洗トイレがつけられた。

現在Cさん宅の広い台所には、コンロと水道がそれぞれ2セットずつ設置されている。コンロはガス式のもの、IH式のものがあり、IH式は業者に薦められ取り付けられたが、現在はほとんど利用していない。

図2 現在のCさん宅の間取り



(出所：調査をもとに筆者作成)

家族数が多かった頃は、各自に個室が与えられることが理想であったといい、2階にもCさんの子ども用の部屋を初めとして6部屋作られているが、現在は一部が物置として利用されているのみである。



写真1 Cさん宅の雪囲い 2016年11月17日 筆者撮影



写真2 Cさん宅のガラス戸で仕切られた居間 2016年11月17日 筆者撮影

#### 4. 考察

調査した住居や事例として挙げた上町地区の人々の住生活における共通点として、以下の事が挙げられる。

- ・ 基本的な間取りは伝統的なものに依拠している。

- ・ 居間は家のほぼ中央部にあり暗くなりがちだが、日光を取り入れるためガラス戸で仕切るといふ工夫がみられる。
- ・ 部屋数（物を収納するスペース）が豊富なため、居間は物が少ない。
- ・ 子供が同居していた時代に使われていた部屋は、子供の別居と共に大半が用途のない部屋となっている。
- ・ 高齢の家族に配慮し、手すりの設置やトイレの移築、増築がみられる。
- ・ 家の柱には各家が所有している山の木を利用している。

本節ではこうした特徴をもとに、子供、高齢者、家への愛着の3つの観点から上町地区の住生活の変遷について考察する。

#### 4.1 子供の役割

まず、Cさんのお話では、住生活が便利になるにつれて、家における子供の役割が失われていったことが分かる。調査した3軒では、増改築による快適さや従来の生活との違いを最も実感したのは風呂のリフォームであるという。かつては風呂やイロリに利用する薪を山から切って運び、薪割りをし、風呂で火を焚くという大変手間のかかる作業が日常的に行われていた。これらの作業は子どもを含む家族全員で行っており、子どもは今とは異なり家の仕事の一部を担う存在であった。生活環境が整い、機械化や電気が進むと従来の作業に充てる時間は大きく減少した。Cさんの息子が子供の頃には既にそうした子どもの仕事は少なくなっていた。

また、生活改善運動の時代には徐々に子共用に部屋があてがわれるようになり、子供が土間の一角で勉強するという光景は見られなくなった。Aさん宅の増改築が近所の家の中でも早い方であったのは、子供のことを考えてであるといい、そうでなければ進んで増改築には踏み切らなかったという。

以上から、時代とともに住生活が便利で快適なものになるのに伴い、かつて家の仕事を担う存在であった子供は、次第に住居を増改築する中心的な要因へと変化したことが分かる。

#### 4.2 高齢者

他の多くの地域同様、上町地区でも高齢化が進行し、世帯数も減少している。調査した家のほとんどには60歳以上の方がいる、または以前高齢の家族がいた。そのため、家の内部では手すりの増設、トイレの移築、増築がみられた。また、手間のかかる薪を使ういろりや薪の風呂、ストーブからガスへの移行、近年ではオール電化にする家も見られる。いろりを廃止したことや維持管理面の問題によって、家の外観も茅葺き屋根から瓦に変わった。子供と同様に、高齢者の存在も住居を変化させていく重要な要因である。今後はこうした高齢者の住まい方に合わせた伝統的な間取りの改変はより一般化、定着していくと考えられる。

また、世帯数の減少に伴い高齢のみの夫婦世帯、単身世帯も増加している。別居している家族と会う頻度は各家庭により異なるが、基本的に単身で生活している高齢者の場合、伝統的な広い家屋の維持、管理が負担になっている場合が多い。冬場積雪量の多い上町地区では雪かきや屋根の雪落としに労力が必要とされる。昔は近所づきあいで屋根の雪を落とす手伝いに行くことも多かったが、現在そうしたことは少なく、手助けが必要な場合、シルバー人材センターに頼ることもあるという。現在高齢者が単身で居住しており、家族が遠方に住んでいるというケースもよく見られるが、そうした家が今後20～30年先どうなるかは課題である。全国的な空き家問題についてはここでは言及しないが、持続的な住居利用、また地域社会の共助のあり方について検討していく必要がある。

#### 4.3 家への愛着

上町地区では昔から家を建てる際、家・蔵・作業場の「三つのタチモン」を構えてこそ一人前であるという認識があった。しかし、現在農作業をする家は減少し、作業場は以前ほど使われなくなった。冠婚葬祭を家で行わないことが増え、行事用の食器類をしまう蔵も一年を通じてほとんど出入りされない。また、家族数の減少によって部屋の多くは用途を失い、使われていない。Cさんは「広い家の維持管理は大変だが、いまある建物はお金をかけて取り壊すことはしないと述べていた。現在地域の若い世代には「三つのタチモン」が不可欠であるという認識はあまりなく、現状として大きな家屋の管理は大変である。昨今は持たない暮らし、断捨離といったミニマルな暮らしも注目されており、今後新しく家を構える際には、蔵や作業場の削られた、あるいは部屋の数を減らした家が生まれるかもしれない。長い目で見ると減築という可能性もあり、従来の増改築中心のリフォームとは逆の方向へと転換する時代を迎えていることが分かる。

調査した家で印象的だったのは、どの家庭でも家の柱に自分の家の山の木を利用していることであった。また、平成元（1989）年に新築をしたBさん宅でも地元の大工に依頼して建てた住居の基本的な間取りは従来のものと同じであり、いつかイロリをつけたいと話していた。上町地区の家は部屋の数が多く、ものを収納するスペースも豊富であるため、居間には最低限のものしか置かず、整然と片付いていた。長い年月を経ても手入れの行き届いた屋内からは、家に対する愛着が窺えた。

少子高齢化や過疎化もあり、今後伝統的な間取りや「三つのタチモン」を維持していくのは難しくなっていくかもしれない。戦後以降の、付け足して快適にしていく増築から、部屋や建物自体も必要なものを残していくという考えに沿った住居が増えていくだろう。しかし、本調査で見られた家への愛着の考えが「必要なもの」として受け継がれていけば、時代に合った住生活のなかにも地域の固有性が残っていくのではないだろうか。

## 5. おわりに

本調査では上町地区の多くのお宅を拝見し、住生活全般に対し多くのお話を伺った。非常にプライベートな内容であるにもかかわらず、地区の方々には親切に取材に応じていただき、また温かくもてなしていただいた。どのお宅でも応接間としての役割を持つ居間に置かれていたのはテーブルと最小限の家具のみであった。これは家が広く物を収納する部屋が多いためでもあるが、普段生活用品一式をひとつの部屋に置いているアパート暮らしの自分にとってはとても新鮮な光景であった。すべての生活行為がワンルームで完結するアパート暮らしとは異なり、ひとつの空間に「人をもてなす」といった用途があることに魅力を感じた。また、そうした伝統的な空間が受け継がれていることに家や地域性、伝統に対する愛着がみられた。これらが住生活のなかに根付いていることが、外部からみてもその地域の暮らしを魅力的に思わせる大きな要因であると感じた。

最後に、上町地区の皆様をはじめとして本稿執筆に協力してくださった方々に感謝申し上げます。